

## 調査結果

### 1 不登校の子ども

#### (1) アンケート調査結果

---

アンケート 76名(男45名、女30名、不明1名)

14歳	38名
13歳	14名
その他	24名

---

#### 1 全般的に、子どもの権利条例および関連施策について情報が伝わっていない子どもが多い。

第1部アンケート結果と比べても、不登校など情報提供の機会が少ない状況にいる子どもには、施設、サービスなどについて情報が相当不足する傾向にある。

子どもの権利条例については、「知らない」が64名(84.2%)、条例関連の仕組みについて、「1つも知らない」が39名(51.3%)、知っている仕組みも数%に留まるものが多く、調査対象となっている子どもが通う子ども夢パークを除くと、「子ども会議」が若干知られている程度である。

#### 2 自分らしくありたい、自分で決めたいという思いが強い。

大切だと思う子どもの権利については、「安心して生きる権利」をあげている子どもが45名(59.2%)と一番多く、第1部アンケート結果の62.7%とほぼ同傾向であるが、自分らしくありたい、自分で決めたいという思いは、第1部アンケート結果より強い傾向を示した。

「ありのままの自分でいる権利」は、29名(38.2%)と比較的多く、「自分を豊かにし、力づけられる権利」は22名(28.9%)、「自分で決める権利」も20名(26.3%)に上る。この「自分で決める権利」を大切にする思いは、第1部の結果(20.7%)より高い傾向にある。

このようなデータを重ねると、自分らしく生きていきたいという思いの強さがうかがえる。なお、「自分で決めたい」内容については、「つきあう友達」41名(53.9%)のほか、「テレビ、ゲーム」40名(52.6%)、「寝る時間」40名(52.6%)、「進学したい学校」33名(43.4%)などの事項が目立つ。

#### 3 自尊感情、自己肯定意識については、第1部アンケート結果に比べると相当に低く、その獲得が課題であるといえる。

「自分のことが好き」「まあ好き」で肯定する子どもが36名(47.4%)で第1部アンケートの72.8%よりも相当に低い。むしろ「あまり好きでない」「好きでない」と否定的な回答した子どもの方が39名(51.4%)と第1部アンケートの26.8%に比べると高く倍近い割合になっている。これは、不登校状態にある子どもが自分を肯定できない状態に置かれていることを映し出しているといえる。

「大切にされていると感じていますか」の間についても、「あまり感じていない」「感じていない」と答えた子どもが13名(17.1%)と、第1部アンケートの7.4%と比べるとずっと高い。

また、「生まれてきてよかった（生きてきてよかった）」とは「あまり思わない」「思わない」との回答が、18名（23.7%）となっており、第1部の8.2%と相当な開きがあり、自己肯定感の獲得が今後の支援の課題であるといえる。

#### 4 ひとりになりたい、という思いがある。

「楽しく夢中になれるとき」としては、「家で遊んでいるとき」が32名（42.1%）ある。「家はホッとでき、安心していられるところ」という意識も68名（89.5%）にのぼり、その中で「ひとりになれるから」を挙げている子どもは23名（33.8%）いる。「学校はホッとでき、安心していられるところ」と思わないと回答した49名の中には、その理由として「集団がにがてだから」が16名（32.7%）であり、「いじめがあるから」の19名（38.7%）について2番目となっている。

#### 5 「つらくてどうしようもない」経験のある子どもは、45名（59.2%）にのぼり、第1部アンケート結果（34.1%）より相当多い。そのうち、「がまんした」子どもが14名（30.4%）いる現実がある。

「つらくてどうしようもない」経験のある子どものうち、主に「友だちや先輩からの暴力、言葉の暴力」「友だちや先輩からの無視、仲間はずれ」などのいじめ関係が30名（66.7%）、「家族からの暴力、言葉の暴力」「家族からの無視、放置」などの家庭内虐待関係が13名（28.9%）である。「学校や児童福祉施設の先生からの暴力、言葉の暴力」「塾、習いごとの先生、スポーツクラブのコーチからの暴力、言葉の暴力」は7名（15.6%）であった。

#### 6 信頼して相談したいと思う人が身近に少ない。

上記のように「つらくてどうしようもない」時の対処法としては、第1部アンケートと同様に、どちらも「がまんした」が1番多いが、2番目の数値がまったく異なることが注目される。

第1部の結果では「他の人に相談した」が22.0%で2番目であるのに対して、不登校の子どもたちのアンケートの2番目は「逃げた」で26.1%である。問15の「何でも話せる人が身近にいますか」の問に、「いる」と答えた子どもは50名（65.8%）、その中では「友だち」31名（62.0%）、「親」27名（54.0%）が多く、「兄弟姉妹」は13名（26.0%）である。しかし、「いない」と答えた子どもが23人（30.3%）にのぼり、第1部アンケートの16.1%よりも倍近い割合であった。

学校に行っていない子どもが信頼して相談したいと思う友だちやおとなの存在は相対的に少ないことがうかがえる。

#### 7 学校はホッとでき、安心していられると答えた子どもは25名（32.9%）であり、第1部アンケート結果（75.6%）に比べて少ない。

学校が「ホッとでき、安心していられるところ」と「思わない」「あまり思わない」と回答した子どもは49名（64.5%）であり、第1部の結果（23.9%）よりはるかに高い数値である。しかも、「学校生活について話し合う」ことについて、発言してみたいと「あまり思わない」「思わない」は46名（60.5%）にのぼり、その理由としては「めんどくさいから」24名（34.8%）、「話し合う方法がわからないから」10名（14.5%）などとなっており、概して消極的になる傾向も見られる。

**8 社会参加の意欲については、積極層と消極層が拮抗する傾向にある。**

地域行事への参加については、「している」「まあしている」と回答した子どもが 37 名(48.7%)、「していない」「あまりしていない」が 39 名(51.3%)であり、地域への発言意欲に関する問に、自分の意見を発言してみたいと「思う」「まあ思う」と回答した子どもが 34 名(44.7%)、「思わない」「あまり思わない」が 39 名(51.3%)である。消極層の 39 名中、「めんどくさい」と答えた子どもが 27 名(69.2%)いることに留意したい。

**9 公共施設の活用については、「あまり利用しない」「利用しない」と回答した子どもは、こども文化センター 63 名(82.9%)、子ども夢パーク 53 名(69.8%)である。**

「どこにあるかわからない」「なにをしているかわからない」と答える子どもが多い。広場・公園も「利用しない」「あまり利用しない」が 41 名(53.9%)にのぼるが、理由は「友だちがいないから」13 名(31.7%)、「安全でないから」9 名(22.0%)が中心である。

## (2) ヒアリング調査結果

---

方法：平成 17(2005)年 6 月 3 日間、主に不登校の子どもが通っている施設で実施

対象：10 名（男 6 名、女 4 名 12～16 歳）

---

不登校の子どものヒアリング調査に関しては、その手法が確立していないことや実施時期の問題（年度始めは子どもの権利に関する状況が不安定である）があり、調査は十分ではなかったが、「子どもの居場所」についての施策の検証を行う上で多くのヒントが得られた。

### 1 おとなや学校への不信感

「おとなはウソをつくから信じたくない。中学校の先生などは約束を破る。」「小学校のときの無実の罪をかぶされた経験」「学校の先生は雰囲気的に信用できなかった。会ったときに感じる冷たい“目”。」など、おとなへの不信感を表現した子どもが多かった。

### 2 学びへの期待

「高校をめざしているため、1日2時間くらい自主学習している。」「今は、高校を出たいと思っている。」「今は高校進学をどうするか考えている。」「高校でもバスケを続けたい。」「子どもの気持ちがちんと分かる先生になりたい。」など、将来への希望や学習を考えている。ただ、学習の支援については、現状のままでよいという声が多い。

### 3 安心してくつろげる場について

「安心してくつろげる場」として、「人の少ないところ」「理想はひとり」「静かで、自分でいられる。」「自分の部屋、誰にも気を使わないですむ。」「一人で静かな時間を過ごせる。」などの声があった。

### 4 頼りにしている人について

「頼りにしている」おとなは、「父母」「お母さん」「家族の人」などが目立つ。「黙って話を聞いてくれるけれど、意見もちゃんと言ってくれる人。」「状況をわかってかばってくれる人。」などの声があった。

### 5 相談したい人について

「相談したい」人は、「家族」「お母さん」が多く、「友だち」との声と同じくらいであった。「友だち」の内容は、「何でも話せる」「気を遣わなくていい」「何があったときに本音で話せる」との答えが多い。

### 6 居場所について

インターネットについては、居場所としての実感はないという子どもが多かった。

理想の居場所については、「考えや気持ちを聞かずに、最初から否定する人のいない場」「子どもの立場で考え、制服・髪色規制などの無駄な規則をやめて」「口を出さない」「スポーツが思いっきりできる」などが挙げられていた。「大人が『場』を作ってあげるとするのはおかしい。創るのは自分。」「支援してほしいとは思わない。自分たちが自然と作りたいという気持ちになり、底から出来上がっていくもの」という意見があった。